

14 残尿を伴った女性下部尿路症状に対し、 猪苓湯を使用した23例の検討

小松泌尿器科
小松 歩

(緒言)

排尿困難・残尿感・頻尿などの下部尿路症状のため受診する女性は多い。

過活動膀胱の治療薬は多彩であるが、残尿量の減少を治療目標にした場合、使用できる α ブロッカーは、ウラピジルのみである。

しかし、ウラピジルは、血圧低下、起立性低血圧等のため内服困難な場合もあり、対応に苦慮することも多い。

今回、残尿を伴った女性の下部尿路症状の改善に、猪苓湯等を使用した23例について検討したので報告する。

(対象)

年齢は、41才から87才(中央値 72才) 40才代:2例 50才代:4例
60才代:3例 70才代:10例 80才代:4例

主訴は、排尿困難:3例 頻尿と排尿困難:5例 頻尿・残尿感:3例
残尿感:2例 繰り返す膀胱炎:7例 持続する膿尿:3例

残尿量は500ml~20ml(中央値 80ml)

15例は、ウラピジルを開始したが、低血圧、起立性低血圧等のため内服できなかった。

3例はウラピジルにて、症状は改善せず、残尿量の減少も認められなかった。

この18例のうち、16例に猪苓湯を投与した。1例は猪苓湯合四物湯、1例は当帰芍藥散単独で開始したが、効果不十分のため、猪苓湯に変更した。

5例はウラピジル内服可能であったものの、効果不十分のため、猪苓湯を併用した。

(結果)

猪苓湯投与した23例中21例において、残尿量が減少した。(0~100ml 中央値10ml) このうち、19例は症状も改善した。

残尿量は減少したものの、症状の改善しなかった2例において、1例は、桃核承気湯に変更し、1例は猪苓湯合四物湯に変更し、それぞれ症状が改善した。

猪苓湯無効例は2例。1例は残尿量の減少を認めたが、排尿困難は改善しなかった。1例は、残尿量も減少せず、頻尿・残尿感も改善しなかった。

有害事象は、全例において認められなかった。

(結語)

猪苓湯は、下部尿路症状の症状改善効果のみならず、残尿量の減少も期待できる可能性がある。